

第1回「魔人就職試験編」テストプレイ

参加者一覧

名前：探偵院金卵

設定：

非常に位の高い上流階級の年頃のお嬢様。希望咲学園の現生徒会長。

密胎殺人事件にて双子の妹（もしくは姉）を亡くしており、第一声の産声にて事件を解いたことで生まれた時から名探偵である。

【魔人能力】：『真相究明価値あり』

対象を限定する精神支配能力。

探偵院金卵が注目した謎は、「謎そのもの」あるいは「謎を作り出した人物」が探偵院金卵に平伏し、その真実を差し出す。

たとえば不可解な殺人事件に探偵院金卵が注目するだけで、真犯人は出頭し、滂沱の涙を流しながら動機を語りだす。

たとえば冷蔵庫の卵が減り過ぎていると思えば、ゴミ箱からパンケーキミックスの空袋が飛び出して、体を折り曲げ謝罪する。

[成功要素]

身体スキル：【健康優良児Lv.1】

知的スキル：【カリスマLv.3】 【優雅Lv.3】

固有スキル：【真相究明価値あり[魔]】 【推理Lv.3】 【探偵Lv.3】

アイテム ：【お金Lv.1】

名前：玉置ケン

設定：

あらゆる問題をケンダマで解決する熱血ケンダマファイター。

魔人能力『ケンダマソウル』

けん玉の性能・形状を自在に変化させる能力。

絶対に壊れない強度になったり、糸が伸縮自在のゴムやワイヤーなどに変化する。

[成功要素]

身体スキル：【運動神経Lv3】 【頑丈Lv2】 【バランス感覚Lv2】

知的スキル：【本質をつく指摘Lv2】 【図太さLv1】

固有スキル：【ケンダマソウル[魔]】 【けん玉スキルLv3】

アイテム ：【けん玉Lv1】

名前：成金ザイバツツ

設定：

明治時代から成金の魔人一族。代々魔人能力を引き継いでおり、常に成金になることができる。

精神性は永遠に成金のままである。

【魔人能力】：『金成り』

成金になることができる。資産残高は常に0円だが、自分も周囲も必ず成金として認識する。

[成功要素]

身体スキル：【デブLv.1】

知的スキル：【見下すLv.2】 【美食Lv.1】

固有スキル：【金成り[魔]】 【窃盗Lv.3】 【侵入Lv.2】

アイテム ：【スーツLv.3】 【性奴隷的な女Lv.2】

名前：飛入 サンタ

【魔人能力】：『プレゼントフォーユー』

相手が望む物を等々の対価を強制徴収した後に与える

[成功要素]

身体スキル：【重いLv.1】 【力持ちLv.1】

知的スキル：【子供想いLv.1】

固有スキル：【プレゼントフォーユー[魔]】 【動物に好かれるLv.1】

アイテム ：【プレゼント袋Lv.1】 【ソリLv.2】 【トナカイLv.3】

名前：架神恭介

設定：

バカで単純でトラブルメーカーな男子高校生。

自作の激辛カレーで親友の妹を殺めてしまったことがきっかけで魔人へと変貌した。

彼の能力は事実上あらゆるカレーを劇薬へと変化させることが可能であり、

地元の不良学生からは「殺人インド人」の異名で恐れられている。

【魔人能力】：『サドンデスソース』

カレーの辛さを自在に操る。

カレーを一睨みするだけで、お子様カレーから激辛カレーまで自由自在の辛味調整を実現する。

[成功要素]

身体スキル：【非童貞Lv.1】 【包丁さばきLv.2】

知的スキル：【エロ知識Lv.2】 【料理知識Lv.3】 【毒知識Lv.2】

固有スキル：【サドンデスソース[魔]】 【料理Lv.3】

アイテム ：【カレーLv.1】

名前：エドウィージュ・ド・パウロウニア

設定：

フランスの貴族の血を引く誇り高き令嬢。

高貴たる令嬢たる指名を果たそうと日頃務めて活動しているが、口さがない人間からは悪役令嬢と呼ばれている。

多くの取り巻きがいる。魔術に興味がある。文武両道で運動神経もよい。

【魔人能力】：『ウィンディフロウ』

周囲50mの範囲に風を吹かせる能力。

[成功要素]

身体スキル：【美少女Lv3】 【運動神経Lv.1】

知的スキル：【高貴Lv.3】 【リーダーシップLv.3】

固有スキル：【ウィンディフロウ[魔]】 【悪役令嬢Lv.3】

アイテム ：【扇子Lv.1】

名前：なめらすじ喇魅悪

設定：

学園公認暗殺者集団『アサシン部』に所属する二年生で尾底骨から尻尾の変わりに毒蛇が生えてる人外少女。

尻尾の蛇は大塚スネークと言う名前があり、人語を介し某MGSの渋いおじ様声のイカした蛇である。

肉体的主人格である喇魅悪より遥かに知的で良識者である。

また、伸縮自在なので偵察にも一役買っているのと、猿の様に木の枝に巻き付いてぶら下がる事も出来る。

切断されると死んでしまうが、1日～2日くらいで尾底骨から生えてくる謎多き蛇でもある。

【魔人能力】：『POISON KISS』

猛毒を生成する能力、喇魅悪からの口吻または尻尾のヘビによる咬傷で毒を付与する

[成功要素]

身体スキル：【身軽Lv.3】 【色気Lv.1】

知的スキル：【毒物取扱Lv.2】 【短気Lv.3】

固有スキル：【POISON KISS[魔]】 【蛇使いLv.3】

アイテム ：【注射器Lv.2】

オープニング

才能の品評会

無機質な照明が、だだっ広いホールを白々しく照らし出していた。

壁も、床も、天井も、継ぎ目のない滑らかな金属。まるで巨大な豆腐の中にいるかのような、現実感のない閉鎖空間。そこに、場違いなほど個性的な7人の男女が集められていた。

希望咲学園の制服を寸分の間なく着こなし、生まれながらの気品を漂わせる生徒会長、**探偵院金卵（たんていいん きんたま）**。その隣では、同じく見るからに高貴なオーラを放つブラチナブロンドの令嬢、**エドウィージュ・ド・パウロウニア**が、優雅に扇子を揺らしている。二人の圧倒的な存在感は、この無機質な空間に奇妙な華やぎを与えていた。

その一方で、ブヒヒ、と下品な笑い声を漏らすデブがいた。高級そうなスーツはち切れんばかりの肉塊を包み、蝶ネクタイが首に食い込んでいる。明治から続く成金一族の末裔、**成金ザイバツ**は、値踏みするように周囲を見渡し、その隣に侍らせた【性奴隷的な女】の尻をいやらしく撫でた。

「おいら馬鹿だからわかんねえけど、ここが試験会場なのか？」

ハチマキを締め、鼻に絆創膏を貼った半ズボンの少年、**玉置ケン**が、愛用の【けん玉】をカチカチと鳴らしながら呟く。彼の純粋な疑問に答える者はいない。

隅の方では、二人の異質な存在が空気をさらに歪ませていた。

一人は、ツンツン頭にギザ歯のアホ面を晒す高校生、**架神恭介（かがみ きょうすけ）**。彼は手にしたタッパーの中身——おそらく【カレー】だろう——を時折うっとりと眺めている。

もう一人は、尾てい骨から毒々しい蛇を生やした少女、**なめらすじ喇魅悪（なめらすじ らみあ）**だ。彼女は壁に背を預け、誰をも拒絶する鋭い視線で周囲を睨めつけている。尻尾の蛇

「大塚スネーク」だけが、冷静に状況を分析するかのようにチロチロと舌を出していた。

そして、その異様な集団から少し離れた場所に、**飛入サンタ**と名乗る好々爺然とした老人が、巨大な【プレゼント袋】の隣で静かに佇んでいた。

共通点は、ただ一つ。

彼らが全員、常識を超えた力を持つ「魔人」であるということ。

そして、世界有数の超巨大企業「スズハラコーポレーション」の採用試験に集まった、候補者であるということだ。

その時だった。

パァンツ！

乾いた破裂音と共に、ホールを中心にスポットライトが突き刺さる。音もなく現れたのは、一人の男。

漆黒のスリーピーススーツを完璧に着こなし、七三に分けた髪はポマードでテカテカに光っている。陶器のように白い肌、切れ長の瞳。その手には、白銀の指揮棒（タクト）が握られていた。

「——ようこそ、才能の原石……いや、磨かれなければゴミに等しい石コロの諸君」

演劇がかった、ねっとりとした声。男——試験官、**一色京（いっしき きょう）**は、指揮棒の先端で円を描くように参加者たちを指し示した。その顔には、心の底から他人を見下す薄ら笑いが貼り付いている。

「私は、このスズハラコーポレーション採用試験にて、君たちの価値を測る試験官、一色京と申します。以後、お見知り置きを。もっとも、君たちのほとんどは、私の記憶に残る価値もなく消えていくのですがね。ククク……」

不快な男。それが、ここにいる全員の共通認識だった。

なめらすじ喇魅悪は舌打ちし、成金ザイバッツは「僕の方が金持ちだブヒ」と呟き、エドウィー
ジュは扇子で顔を隠し、侮蔑の視線を投げかける。

一色はそんな反応を愉しむように、話を続けた。

「さて、未来の社畜候補生の皆様。この試験は至ってシンプル。私が提示するいくつかの『クエスト』に挑戦し、ポイントを獲得していただきます。全ての試験が終了した時点で、最も多くのポイントを獲得した、ただ一名だけが、我が社の輝かしい未来を担う栄誉を手に入れることができるのです」

彼は指揮棒を軽やかに振るう。

「無論、試験は君たちの魔人能力を最大限に活用することを前提としています。試験中の暴力、裏切り、騙し討ち……結構！ 大いに結構！ 君たちの持つ最も醜悪で、最も美しいエゴを、この私にプレゼンテーションしてくれたまえ！ ああ、ご安心を。万が一、試験中に腕の一本や二本がもげようが、心臓が止まろうが……我が社が誇る専門部署『お祈り部隊』が、即座に君たちを修復し、次の舞台へと引きずり戻してくれます。死ぬことすら、自由にはならない。素晴らしいでしょう？」

悪魔の福音だった。参加者たちの間に緊張が走る。

ただ一人、探偵院金卵だけは涼しい顔で微笑んでいた。【カリスマLv.3】と【優雅Lv.3】を持つ彼女にとって、この程度の茶番は日常の一コマに過ぎないのかもしれない。

一色京は、その反応に満足げに頷くと、再び指揮棒を天に掲げた。

「では、最初の余興と参りましょう。君たちの価値を、私自身に直接売り込む時間です」

【第一試験課題：自己アピール】

「自己紹介を兼ねて、自分が当社にどのような利益をもたらすことができるかを、1人3分で簡潔にアピールせよ」

「さあ、誰からでも構いませんよ？ 君という商品を、いかに魅力的に見せることができるか。そのプレゼン能力、拝見させていただきます」

一色は、まるでオーケストラの開演を告げる指揮者のように、優雅に、そして残酷に笑った。

「それでは、才能の原石を発掘するための『選別』を始めよう。諸君の健闘を、心から嘲笑いながら祈っているよ」

静まり返ったホールに、彼の声だけが響き渡る。

最初の試練。それは、言葉と虚栄心、そして己の能力への自信だけが武器となる、剥き出しの自己顕示欲の戦いだった。

第一試験

自己アピール

「さあ、始めなさい。君という商品のプレゼンを」

一色京が指揮棒で優雅にお立ち台を示すと、真っ先に動いたのは**成金ザイバッツ**だった。彼は【性奴隷的な女】の尻をポンと叩き、巨体を揺らして前へ出る。

「ブヒヒ！ 一番手はこの僕だ！ 聞け、貧乏人ども！ 僕を雇えば、スズハラコーポレーションは未来永劫、安泰となる！ なぜなら、僕自身が『富』そのものだからだ！」

ザイバッツが懐から取り出した札束を天にばら撒く。だが、その紙片はヒラヒラと舞い落ちるそばから、ただのティッシュペーパーへと変わっていった。『金成り』の能力は、あくまで「成金だと認識させる」だけの虚構。実体のある富を生むわけではない。

「ブヒィ……どうだ、僕の力は！ この女も証言している！」

「は、はい……ザイバッツ様は、すごいですう……」

女の気の無い返事に、一色は冷ややかに笑った。

「クク……面白い道化だ。虚栄心だけで塗り固められた、見事なまでの張り子の虎。だが、我が社は美術館ではないのでね。評価は1点だ」

次に立ったのは、対照的に活力みなぎる少年、**玉置ケン**だ。

「おいら、難しいことはわかんねえ！ けど、会社のどんなトラブルも、この【けん玉】で解決してみせるぜ！」

彼は宣言すると同時に、愛用のけん玉を天に放る。『ケンダマソウル』の力が発動し、けん玉は瞬時に巨大な鉄球へと姿を変えた。糸はしなやかなワイヤーとなり、ケンはそれを巧みに操っ

て、ホールの天井スレスレをかすめるアクロバティックなパフォーマンスを披露する。【運動神経Lv3】と【けん玉スキルLv3】が遺憾なく発揮された、圧巻の光景だった。

「ほう。芸としては一流だ」一色はわずかに目を細める。「実直なスキルアピール、嫌いではない。だが君のその単純さが、我が社の複雑怪奇な問題に対応できるかね？ 6点でしょう」

続いて、アホ面をぶら下げた**架神恭介**がタッパーを手に登壇した。

「ウス！ 俺、架神恭介！ 俺を雇えば、御社の社員食堂を世界一にします！」

彼はタッパーの蓋を開けた。途端に、官能的ですらあるスパイシーな香りがホールに充満する。

中身は、禍々しいほどに赤黒い【カレー】だった。

「俺の『サドンデスソース』は、どんなカレーも究極の一皿に変える！ 福利厚生は会社の要！

社員の胃袋を掴めば、業績アップ間違いなしっすよ！ 試験官さんも、味見どうスか？」

その大胆不敵な提案に、一色は肩を揺らして笑った。

「面白い！ 社員の福利厚生を人質にするテロリストのようだ！ その発想、その度胸、実に素晴らしい！ 8点だ！」

カレーの匂いに眉をひそめながら、**エドウィージュ・ド・パウロウニア**が優雅に歩み出る。

「野蛮な匂いですわね」

彼女は扇子を広げると、魔人能力『ウィンディフロウ』を発動。優雅な風が巻き起こり、恭介が

放ったカレーの香りをホールから一掃した。

「わたくしを雇うことは、すなわち秩序と格調を手にする事。わたくしの【リーダーシップ】は、烏合の衆すら精鋭部隊へと変貌させますわ。この程度の混沌、一瞬で掌握してご覧にいます」

その言葉通り、彼女の【高貴Lv.3】のオーラは、場の空気を完全に支配していた。

「古典的だが、完成された美しさだ。状況への対応力も見事。だが君のそのプライドが、泥水をすすする局面で役に立つかな？ 7点」

次に、誰もがその存在を忘れていた影の中から、声がした。

「……メリット、か」

なめらすじ喇魅悪は、お立ち台に上がることなく、壁に寄りかかったままだ。

「見ての通りだ。競合他社の厄介な役員を『処理』する。社内の『裏切り者』を始末する。そういう汚ねえ仕事、全部引き受けてやる」

彼女の言葉と同時に、尾てい骨から生えた毒蛇「大塚スネーク」がスルスルと床を這い、一色の足元で鎌首をもたげた。

『——ボス。交渉成立と行こうじゃないか』

渋い声で囁く蛇に、一色は初めて、愉悦に満ちた表情を浮かべた。

「ククク……アハハハ！ 実に分かりやすい！ 実に合理的だ！ 我が社がどれだけ汚い仕事をしているか、よく理解しているじゃないか！ そのダーティな実利主義、気に入った！ 9点だ！」

ざわめきが収まらぬ中、好々爺然とした**飛入サンタ**が静かに口を開く。

「ワシはサンタじゃ。御社に必要なものを何でも【プレゼント】しよう。優秀な人材、画期的な技術…ただし、それ相応の『対価』はいただくがの」

その提案は堅実だったが、**喇魅悪**の強烈なアピールの後では、あまりにインパクトに欠けていた。

「等価交換か。ビジネスの基本だが……芸がない。3点」

そして、最後に。

全ての視線が、ただ一人残った少女、**探偵院金卵**に注がれる。

彼女は、まるで自邸の庭を散歩するかのように優雅な足取りでお立ち台に立つと、一色京を真っ直ぐに見据えた。

「ワタクシを雇う利益、ですって？ フフ、それを言葉で説明する必要など、ありませんわ」

その瞬間、探偵院金卵の【カリスマLv.3】が放つ圧が、ホール全体を支配した。

「——ワタクシは、『謎』あるところに赴き、その『真相』を暴く者」

彼女は、静かに、しかし絶対的な確信を持って言い放った。

「『真相究明価値あり』——この試験の目的という『謎』よ。ワタクシに平伏し、その真実を差し出しなさい」

魔人能力が、発動した。

それは、物理的な攻撃でも、精神的な攻撃でもない。

「謎」という概念そのものへの、絶対的な支配宣言。

一色京の顔から、笑みが消えた。

彼の魔人能力【舞台支配（シアター・ルーラー）】が、未知の力による侵食に無意識の抵抗を示す。だが、概念に干渉する金卵の能力の前では、限定的な物理法則の書き換えなど無意味だった。

一色の脳裏に、意図せず情報が流れ込む。この試験の真の採点基準——『印象点』の存在。自分を楽しませるエンターテインメント性こそが、最も重要な評価項目であるという、彼自身の胸の内に秘めた「謎」の答えが。

時が、止まったかのようにだった。

やがて、一色の口から、押し殺したような声が漏れる。

「……ク……クク……」

それは次第に大きくなり、やがて狂気的な高笑いとなってホールに響き渡った。

「アッハハハハハ！ 素晴らしい！ ブラボーォ！ なんてことだ！ 試験官であるこの僕自身を！ この試験という舞台そのものを『謎』として定義し、ハッキングするだと！？ 最高だ！ 君は最高だ、探偵院金卵！ まさに我が社が求める、ルールの外側を歩く才能！」

彼は恍惚の表情で指揮棒を振り上げ、叫んだ。

「満点だ！ 10点くれてやるッ！！」

こうして、波乱に満ちた第一試験は幕を閉じた。

一人の少女が、その圧倒的な能力で試験官すらも手玉に取り、全ての参加者の度肝を抜くという、鮮烈な結末と共に。

【第1試験 結果報告】

[自己アピール]

▼獲得ポイント

探偵院金卵: 10点

なめらすじ喇魅悪: 9点

架神恭介: 8点

エドウィージュ・ド・パウロウニア: 7点

玉置ケン: 6点

飛入サンタ: 3点

成金ザイバツツ: 1点

幕間：不協和音のプレリュード

「素晴らしいッ！ 実に素晴らしい幕開けでした！」

一色京の甲高い声が、静まり返ったホールに響き渡る。彼の視線はただ一人、探偵院金卵に注がれ、その瞳は狂信者のように爛々と輝いていた。

「まさかこの私自身が試されるとは！試験官の秘密を白日の下に晒すことで、己の価値を証明する…！脱帽です、探偵院金卵君！君の存在そのものが、我が社にとって計り知れない利益となるでしょう！」

過剰なまでの賛辞に、金卵はただ優雅に微笑むだけだった。しかし、他の参加者たちの心中は穏やかではない。

「チッ…」

壁際で舌打ちしたのは、**なめらすじ喇魅悪**だ。高得点を獲得したにも関わらず、その上を行かれたことが気に食わない。隣で『ボス、奴は危険だ』と囁く大塚スネークを、彼女は無言で撫でた。

「ふん、小賢しい真似を…」

扇子で口元を隠しながら、**エドウィージュ**が侮蔑の呟きを漏らす。彼女の【高貴Lv.3】のプライドは、真正面からの勝利以外を認めない。金卵への敵愾心が、紫水晶の瞳に炎を宿らせていた。

「ブヒィ…僕の【金成り】がたった1点だと…？審美眼のない貧乏人が…！」

不平を漏らす**成金ザイバツ**を、一色はゴミを見るような目で一瞥した。

「さて、茶番はここまで。一位に輝いた天才と、その他大勢の凡才の皆様には、早速次の舞台へと移っていただきます。ついて来なさい」

一色が指揮棒で扉を示すと、重々しい音を立てて壁の一部がスライドした。現れたのは、先程のホールとは対照的な、狭く長い通路だ。

参加者たちが無言で後続く中、一色は上機嫌に鼻歌を口ずさみながら歩く。その背中に向かって、何人もの人間が殺意のこもった視線を送っていたが、彼は全く意に介さない。

やがて一行がたどり着いたのは、一つの会議室だった。

窓一つない、完全な密室。壁も床も、吸音材のようなもので覆われており、自分たちの足音すら

不気味に吸収されていく。中央には巨大なマホガニーのテーブルが鎮座し、その上には——おびただしい数のトランプが、無造作な山となって積み上げられていた。

「さあ、諸君。次の試験会場にようこそ」

一色はテーブルの脇に立つと、芝居がかった仕草で両腕を広げた。

「第一試験では、君たち個々の『輝き』を見せてもらいました。しかし！我が社はチームで動く組織。個人の能力がいかに優れていようと、他者と協調できぬ者は、ただの欠陥品にすぎません」

協調、という言葉に、参加者たちの間に緊張が走る。この個性とエゴの塊のようなメンバーで、まともな協力など成立するはずがない。誰もがそう思った。

その疑念を見透かしたように、一色は愉悦に口元を歪める。

「そこで、第二試験は『グループワーク』とさせていただきます」

彼は指揮棒の先で、テーブルの上のトランプの山をつついた。

【第2試験：グループワーク】

「課題は、参加者全員で協力し、このトランプを使って一時間以内にできるだけ巨大なタワーを完成させること」

あまりに馬鹿げた課題内容に、数名が呆気にとられた顔をする。

玉置ケンが思わず「トランプタワー…？」と呟き、**架神恭介**は「マジかよ」と頭を掻いた。

「ククク…その顔が見たかった。もちろん、ただ手先が器用な者を評価するのではありませんよ？この『協力』という名の蠱毒の中で、君たちがどのような役割を演じるのか…建設的な意見を出す者、作業を妨害する者、混乱を収拾する者、あるいは…ただ静観する者。その全てを、この私が評価させていただきます」

彼の言葉は、暗に示唆していた。タワーを作ること自体が目的ではない。この状況下で、いかに「自分」という商品をアピールできるかこそが問われているのだと。

「採点は、この試験における君たちの貢献度を総合的に判断し、各人0～10点を与えます。制限時間は、今からきっかり一時間」

一色は壁に埋め込まれたデジタル時計を指し示す。表示が【60:00】に切り替わり、静かにカウントダウンを開始した。

「それでは、始めなさい。才能という名のカードで、天まで届く虚構の塔を築き上げてみせろ！」

狂気の指揮者がもたらした、新たな混沌。

閉鎖された会議室で、7人の魔人による不協和音だらけの共同作業が、今、静かに始まろうとしていた。

第二試験

虚構のバベル

「始め！」

一色京の号令と同時に、会議室の空気が張り詰めた。最初に動いたのは、プラチナブロンドの誇り高き令嬢、**エドウィージュ・ド・パウロウニア**だった。

「皆様、ご静粛に。この試験、わたくしが指揮を執りますわ」

【リーダーシップLv.3】と【高貴Lv.3】から放たれるオーラは、烏合の衆を黙らせるに十分な威圧感を備えていた。彼女はテーブルのトランプを一瞥し、即座に最も安定するであろうピラミッド型の設計図を頭に描くと、的確な指示を飛ばし始める。

「あなた、体格が良いようですから土台をお願いしますわ。そこのお嬢さんは手先が器用そうですね、中層部を…」

その指示に、最も素直に応えたのは**玉置ケン**だった。

「おう、任せとけ！」

彼は持ち前の【運動神経Lv.3】と【バランス感覚Lv.2】を遺憾なく発揮。カードの微妙な角度や重心を瞬時に見抜き、驚異的な速さと正確さで安定した土台を組み上げていく。その様は、もはや職人芸の域だった。

第一試験の覇者、**探偵院金卵**も、エドウィージュの指示に【優雅Lv.3】の所作で応じ、協力姿勢を見せる。だがその瞳は、ただ作業に没頭しているわけではない。【探偵Lv.3】の鋭い観察眼が、この共同作業に潜む不和の種を冷静に分析していた。

しかし、全員が素直に従うはずもなかった。

「かったりい…。なんでこいつの言うこと聞かなきゃなんねーんだよ」

架神恭介はエドウィーजूの指示を鼻で笑うと、テーブルの反対側で自分勝手にタワーを組み始めた。【料理Lv.3】で培われた手際の良さでカードを積み上げるが、建築の知識がないそのタワーは、見た目からしてひどく不安定だった。

そして、最悪の妨害者（妨害デブ）が動く。

「ブヒヒ、そんな貧乏くさいやり方でうまくいくのかねえ？ 僕がもっと効率的な方法を教えてやろう！」

成金ザイバッツはそう言うと、わざとらしくテーブルに体重をかけ、大きく揺らした。その悪意に満ちた振動は、まず不安定な架神のタワーを直撃した。

ガシャアァン！

衰れたタワーは、一瞬でただのカードの山に戻った。

「てんめえ…このデブがッ！！」

瞬時に沸騰した恭介が、ザイバッツに掴みかかる。

「ブヒィ！？ や、やるのか！ この僕に！」

協力の場合は、一瞬にして低俗な罵り合いの場へと変貌した。

「まあまあ、二人とも…」

見かねた**飛入サンタ**が仲裁に入るが、彼の善意は激昂した不良と性根の腐った成金の前では無力だった。

その時、これまで壁際で静観を決め込んでいた影が動いた。

「——うるせえんだよ、クズどもが」

なめらすじ喇魅悪の【短気Lv.3】の堪忍袋の緒が、ついに切れた。彼女の行動は迅速かつ合理的。尾てい骨から伸びた毒蛇「大塚スネーク」が、床を滑るように疾走！ その尾がしなり、恭

介とサイバッツの口を寸分の狂いなく物理的に塞ぎ上げた。

「んぐっ！？」「ぶひっ！？」

猿ぐつわを噛まされた二人がもがくが、【蛇使いLv.3】で制御された蛇の拘束から逃れることはできない。強引な手段ではあったが、会議室に静寂が戻った。

「…野蛮ですわ。ですが、好都合」

エドウィージュは忌々しげに呟き、作業の再開を促す。だが、時間は既にごっそりと削られ、協力体制は崩壊。残ったメンバーだけでは、巨大なタワーの完成はもはや絶望的だった。

誰もが諦めかけた、その時。

「——もう、おしまいですわ」

静かな声と共に、信じられない光景が広がった。

探偵院金卵が、皆で必死に積み上げてきたタワーの土台を、自らの手で静かに崩したのだ。

ガシャガシャガシャ……！

玉置ケンの血と汗の結晶が、無に帰す。

「なっ…！ 何をするんですの！」

エドウィージュが金切り声を上げた。他のメンバーも、何が起きたのか理解できず、ただ呆然と立ち尽くす。

全てのカードがテーブルに散らばったのを見届けた金卵は、ゆっくりと一色京に向き直った。

そして、第一試験の再現とばかりに、絶対的な自信に満ちた笑みを浮かべて宣言した。

「試験官殿。この破綻したプロジェクトを継続することは、無意味なリソースの浪費に他なりません。ワタクシは、この『失敗』を明確化し、迅速に『損切り』するという形で、御社に貢献いたしますわ」

彼女の【推理Lv.3】は、試験の表面的な課題の奥にある、一色の求める「答え」を的確に導き出していた。

「——無駄なタワーを天まで積み上げる愚を犯すより、失敗から学び、次へ進む。それこそが、企業を成長させる真の『協力』ではありませんこと？」

その言葉を聞いた一色京は、しばらく無言だった。

やがて、その口元が、またしても歓喜に歪んでいく。

「ク……ククク……アッハハハハハハハハ！ 最高だ！ 最高だよ君はァ！ 探偵院金卵ッ！！」

彼は指揮棒で天を突き、恍惚と叫んだ。

「そうだ！ その通りだ！ 建設的な破壊！ 破綻からの論理的な撤退！ それこそがビジネスの本質！ 凡人どもが積み上げたガラクタを壊し、そこに新たな価値を見出す！ 君は、この茶番の本質を完璧に見抜いているッ！」

一色京の狂的な賛辞が響き渡る中、第二試験の終了を告げるアラームが、無情に鳴り響いた。

物理的なタワーは、そこにはなかった。

だが、各々のエゴと才能がぶつかり合って生まれた、見えない「塔」は、確かにそこに存在していた。

【第2試験 結果報告】

[グループワーク]

▼獲得ポイント

探偵院金卵: 10点

なめらすじ喇魅悪: 8点

エドウィー・ジュ・ド・パウロウニア: 5点

玉置ケン: 4点

飛入サンタ: 2点

架神恭介: 0点

成金ザイバツツ: 0点

幕間：亀裂と嘲笑

「素晴らしい！ 実にクレバーな結論でした、探偵院金卵君！」

一色京の賞賛が、瓦礫と化したトランプの山に虚しく響く。しかし、その声に耳を傾ける者は、もはや誰もいなかった。会議室の空気は、第一試験終了時とは比較にならないほど陰悪に、そして冷え切っていた。

「……ふざけないでくださる？」

静寂を破ったのは、**エドウィー・ジュ・ド・パウロウニア**だった。その声は、これまで保っていた

【高貴】の仮面を剥ぎ取り、剥き出しの怒りに震えている。

「わたくしの指揮を、築き上げた努力を…！ あなたは、全てを台無しにしたのですわよ！」

扇子を握りしめるその手は、怒りのあまり白くなっていた。彼女の【リーダーシップ】は、金卵の「建設的な破壊」によって、根底から否定されたのだ。

「おいおい、そりゃねえだろ探偵さんよお！」

玉置ケンもまた、純粋な怒りを露わにしていた。彼の額には青筋が浮かんでいる。「おいら、本気で協力しようとしたんだぜ？なのに、あんたはそれを…！」

彼の【図太さLv.1】の精神も、仲間（だと信じていた者）からの裏切りには耐えられなかった。

糾弾の視線が集中する中、**探偵院金卵**はただ涼しい顔で立っていた。

「ワタクシは、最も合理的で、最も御社に利益のある選択をしたまでですわ。結果が全て、ではありませんこと？」

その【優雅】な態度は、火に油を注ぐだけだった。

「てめえ…！」

大塚スネークの拘束から解放されたばかりの**架神恭介**が、今にも飛びかからんばかりの勢いで金卵を睨みつける。それを、隣にいた**なめらすじ喇魅悪**が、面倒くさそうに制した。

「やめとけ。こいつに何言っても無駄だ」

喇魅悪自身も、金卵のやり方には反感を覚えていたが、それ以上に、この状況を楽しんでいる一色京への苛立ちが勝っていた。

参加者たちの間に走った決定的な亀裂。その不協和音を、一色京はまるで極上の音楽を聴くかのように堪能していた。

「ククク…いいじゃないか、その不信と憎悪に満ちた顔！ 協力などという甘っちょろい幻想が打ち碎かれた、その瞬間こそが人間が最も輝く時だ！ 素晴らしい！ 実に素晴らしいエンターテインメントだ！」

彼は恍惚の表情で指揮棒を振るうと、再び壁の一部をスライドさせた。

「さあ、傷心の皆様。感傷に浸る暇はありませんよ。次の舞台が、君たちを待っている」

新たな通路の先は、先程までとは打って変わって、騒々しい機械音が鳴り響く工場のような空間だった。薄暗い照明の中、ずらりと並んだ7本のベルトコンベアが不気味に稼働している。そして、各コンベアの始点には、まるで生きているかのように精巧な、ガラス製の美少女フィギュアが一体ずつセットされていた。

「ここは、かつて我が社が製造していた伝説の商品、『クリスタル・エンジェル』の検品ラインです」

一色は、陶醉したように語り始めた。

「この世のあらゆる『萌え』を凝縮した、究極の芸術品…しかし、あまりに繊細なため、製造ラインでの破損率が99%を超え、プロジェクトは凍結。今ではこうして、新人研修の道具として余生を送っているというわけです」

彼は指揮棒で、参加者たちの目の前にあるそれぞれのレーンを指し示した。

【第3試験：絶対検品ライン "クリスタル・エンジェル"】

「課題は、これから流れてくる10体のガラス製フィギュアを、直接触れることなく障害から守り抜き、終点の『合格ボックス』まで送り届けること」

「障害、ですって？」

金卵が問うと、一色は工場の奥、巨大なシュレッダーが設置された暗がりを目指した。

「ええ。あそこからは、過去に碎け散った幾万もの『クリスタル・エンジェル』たちの怨念…もとい、ガラスの破片が、君たちのレーンに向かってランダムに射出されます。この脆いフィギュアにとっては、些細な衝撃でも致命傷となるでしょう」

そして、一色は悪魔のように笑って、この試験の真のルールを告げた。

「採点ルールは、以下の通り。守護点：フィギュア1体成功で+3pt。そして…破壊点：他者のフィギュアを1体破壊するごとに+2pt。ただし、破壊する際も、直接触れてはなりません」

その一言で、場の空気が凍り付いた。

守るだけでは、高得点は望めない。他者を蹴落とすことで、より多くのポイントが得られる。

これは、「協力」の対極にある、剥き出しの「競争」と「妨害」の試験だった。

「ああ、もちろんペナルティもあります。誤ってフィギュアに触れてしまった場合、『汚損』とみなし、-5pt。さあ、どうしますかな？ 聖人君子を気取って地道に守るか、悪魔となって他者を食い物にするか…君たちの『本性』、じっくりと拝見させていただきますよ」

第二試験で生まれた亀裂を、さらに広げ、抉るような悪意に満ちたルール。

一色京は、もはや隠す気もない愉悦の表情で、スタートの合図を告げる。

「それでは、始めなさい！ 美しき硝子の天使たちを、血も涙もない悪魔たちの手から守り（あるいは破壊し）たまえ！」

ウィーン…という機械音と共に、7体の『クリスタル・エンジェル』が、ゆっくりと死地へと動き始めた。

第三試験

硝子仕掛けの殺意

ウィィン——。

無機質な稼働音と共に、7体のガラスの美少女『クリスタル・エンジェル』が、運命のベルトコンベアを滑り始めた。その瞬間、工場は戦場と化した。

「——我がけん玉は、絶対防御の魂（ソウル）だぜッ！」

いち早く動いたのは**玉置ケン**だった。彼の魔人能力『ケンダマソウル』が発動し、けん玉の糸が瞬時に伸縮・分裂。彼のレーンの上空に、まるで蜘蛛の巣のような精密なワイヤーネットを張り巡らせた。【けん玉スキルLv3】と【運動神経Lv3】の合わせ技。飛来する破片を完璧に捕らえる、まさに鉄壁の防御だった。

「ワシは…この子たちを守るだけじゃ」

飛入サンタは、【トナカイLv.3】の愛獣を呼び出し、レーンの横にどっしりと構えさせた。その巨大な体躯は、それだけで信頼感のある物理的な盾となる。

だが、この試験はただ守るだけの性善説で乗り切れるほど甘くはない。

「フン、小賢しい…！ 悪意なき者に、勝利の女神は微笑みませんわ！」

エドウィージュ・ド・パウロウニアは扇子を広げ、魔人能力『ウィンディフロウ』を発動。彼女のレーンに飛来するガラス片を、優雅な風の流れて弾き飛ばす。しかし、その風はただの防御壁ではなかった。彼女の【悪役令嬢Lv.3】の悪意が込められた風は、弾いた破片の軌道を巧みに制御し、鋭い凶器となって隣のレーン——**探偵院金卵**へと襲いかかった！

「お見事ですわ、エドウィージュさん。ですが——」

金卵は、殺到する二次被害の破片を前にしても、表情一つ変えない。

「——あなたの行動（悪意）は、あまりに読みやすい」

彼女はコンベアの縁にあった金属製のプレートを、つま先で軽く蹴り上げた。【推理Lv.3】によって完璧に計算された角度。プレートは回転しながらエドウィージュの放った破片を弾き返し、その跳弾は、まるで吸い寄せられるかのように、さらに隣のレーンへと飛んでいった。

「ブヒッ！？」

標的は、他人の妨害に気を取られ、自分のレーンがガラ空きだった**成金ザイバツ**。彼のフィギュアは、因果応報の破片を浴びて、甲高い音と共に木っ端微塵に砕け散った。

「ブヒィィィッ！ 僕のフィギュアがああ！」

逆上したザイバツは、理性を失った。飛来した別のガラス片を【窃盗Lv.3】のスキルで素手で掴み取り、憎き架神恭介のレーンへと投げつけようとする。

「汚損ですわ、成金さん」

金卵の冷たい指摘と同時に、一色京が甲高い声で叫んだ。

「アウトー！ 汚損ペナルティ、マイナス5点！ ああ、なんという醜態！ 怒りで我を忘れ、ルールすら守れないとは！ まさに豚の所業！」

ザイバツは破片で掌を切り裂き、【軽傷】を負いながら、ポイントまで失うという最悪の結果を招いた。

「てめえ、このクソデブがッ！！」

その醜態に、ついに**架神恭介**の堪忍袋の緒が切れる。彼は防御に使っていた板をザイバツに投げつけようと振りかぶった。その無防備な背中に、新たなガラス片が突き刺さり、彼のフィギュアもまた、儚く砕け散った。

混沌と破壊が渦巻く中、最も冷静に、そして最も冷徹にポイントを稼いでいた者がいた。

なめらすじ 喇魅悪だ。

彼女は尾てい骨から伸びる毒蛇「大塚スネーク」を盾のように構え、飛来する破片を完璧に防

ぎきる。だが、それだけでは終わらない。

『——ボス、隣のトナカイ、足元ががら空きだ』

「わかってる」

喇魅悪の指示を受け、大塚スネークはその尾を鞭のようにしならせた。蛇はサンタのトナカイの足元をすり抜け、そのレーンに並ぶ無垢なフィギュアたちを、次々と薙ぎ払っていく！

パリン！ パリィン！

「おおっ！？ こ、こら、やめなさい！」

サンタが慌ててトナカイを動かすが、俊敏な蛇の攻撃を防ぎきることはできず、数体の『クリスタル・エンジェル』が犠牲となった。

やがて、10体のフィギュア全てが流れ終わり、試験終了のブザーが鳴り響く。

そこには、三者三様の結末が広がっていた。

ひたすら守りに徹し、10体全てを完璧に守り抜いた玉置ケンと探偵院金卵。

攻防一体の戦術で、守護と破壊の両方でポイントを稼いだ、なめらすじ喇魅悪。

そして、互いの足を引っ張り合った結果、全てを失った者たち。

一色京は、その惨状を満足げに見下ろし、結果を告げた。

「ククク…実に見ごたえのある足の引っ張り合いでした。それでは、結果発表です！」

【第3試験 結果報告】

[絶対検品ライン "クリスタル・エンジェル"]

▼試験内ポイント

1位: なめらすじ喇魅悪 (32pt)

2位タイ: 探偵院金卵 (30pt)

2位タイ: 玉置ケン (30pt)

4位タイ: エドウィージュ・ド・パウロウニア (18pt)

4位タイ: 飛入サンタ (18pt)

6位: 架神恭介 (0pt)

7位: 成金ザイバッツ (-5pt)

▼試験加点

なめらすじ喇魅悪: 10点

探偵院金卵: 9点

玉置ケン: 9点

エドウィージュ・ド・パウロウニア: 8点

飛入サンタ: 8点

架神恭介: 0点

成金ザイバッツ: 0点

幕間：加速する悪意

「ククク…素晴らしい！醜い！実に人間らしい足の引っ張り合いでした！」

一色京の狂的な賛辞が、ガラス片の散らばる工場に虚しく響き渡る。

しかし、その声に耳を貸す者はもういない。参加者たちの間に生まれた亀裂は、もはや修復不可能なほどに深まっていた。

「おい、ヘビ女…てめえ、よくも…」

飛入サンタが、普段の温厚な顔つきからは想像もできないほどの怒気を込めて、**なめらすじ喇魅悪**を睨みつける。彼の聖域を土足で踏みにじられた怒りは、もはや隠しようもなかった。

「ハッ、てめえがノロマなのが悪いんだろうが」

喇魅悪は鼻で笑い、舌打ちする。彼女にとって、サンタの怒りなど意に介す価値もなかった。

「……」

架神恭介と**成金ザイバツ**は、互いに殺意のこもった視線を交わしたまま、一言も発しない。低レベルな妨害合戦の末に共倒れとなった二人の間には、もはや言葉は不要だった。ただ、次の機会があれば必ず相手を叩き潰すという、純粋な殺意だけが渦巻いていた。

「皆さん、落ち着いてくださいまし」

その陰悪な空気を切り裂いたのは、意外にも**エドウィージュ**だった。

「見苦しいですわ。この程度のことで取り乱すなど、高貴なる者のすることではありません。次の試験で、己の力を証明すればよいだけの話」

彼女は冷静さを取り戻し、扇子で優雅に口元を隠す。しかし、その瞳の奥では、トップを走り続ける**探偵院金卵**への嫉妬の炎が、より一層激しく燃え盛っていた。

そして、その探偵院金卵と、常にフェアプレーを貫く**玉置ケン**は、この混沌の中心から一步引いた場所で、それぞれの思惑を胸に沈黙を守っていた。金卵は、この悪意の連鎖すらも計算の内とばかりに冷静に状況を分析し、ケンは、この理不尽なゲームへの純粋な怒りを、その拳の中に固く握りしめていた。

「さあさあ、仲間割れはそのくらいにして。君たちのその腐った友情ごっこには、心底うんざりしますのでね」

一色は、そんな彼らの様子を心底楽しそうに眺めると、新たな扉へと一行を促した。

次に通されたのは、体育館のように広大な講堂だった。

がらんとした空間の片方の端には、一本の線が引かれている。そして、はるか向こうの壁際には、一人の男が壁に向かって立っていた。一色とは別の、屈強な体格をした試験官だ。

「さあ、皆さん。次の試験は、君たちも幼い頃に親しんだであろう、あの懐かしい遊びです」
一色は、講堂の隅に設置されたオペレーター席のような場所に腰を下ろすと、マイクを通して
ねっとりとした声を響かせた。

【第4試験：だるまさんがころんだ】

**「課題は、あそこにいる鬼役の試験官が『だるまさんがころんだ』と言い終わって振り向くま
でに、鬼の背中にある『合格ボタン』を押すこと」**

あまりにシンプルなルール。だが、この男が提示する試験が、ただの子供の遊びであるはずがな
かった。

「採点基準は、ボタンを押した順番。一番早かった者が10点、次が9点、8点と続きます。もち
ろん、失格者は0点」

一色は、愉しげに特殊ルールを付け加えた。

**「特殊ルールその1。鬼が振り向いた瞬間に、少しでも動いていると判定された者は、壁に仕掛
けられた銃から電撃弾が発射され、気絶して失格となります」**

彼の言葉と同時に、講堂の壁一面に無数の銃口が出現し、参加者たちに狙いを定めた。

**「そして、最も重要なルールその2。『動いている』の判定には、物理的な動きだけでなく、魔
力や能力の使用痕跡…例えば、目に見えるオーラや空間の歪みなども含まれます。我が社の最新
鋭センサーが、いかなるエネルギーの揺らぎも見逃しません」**

その一言が、参加者たちに戦慄を走らせた。

魔人能力の多くは、発動時に何らかのエネルギー的な痕跡を残す。つまり、安易な能力の使用
は、即、失格に繋がるということだ。

精神内部で完結する能力は検知されない、という但し書きはあるものの、どこまでが「外部に漏れない」のか、その線引きは極めて曖昧だった。

「ククク…君たちの強力なオモチャを、どう使いますかな？あるいは、使わずに、己の肉体だけでこの距離を走破しますかな？そして、この試験、他者への妨害行為は一切不問とします。どうぞ、ご自由に殺し合ってください」

マイク越しの声が、残酷に笑う。

スタートラインに並ばされた7人は、互いに牽制し合い、疑心暗鬼の視線を交わす。

前へ進むべきか、他者を蹴落とすべきか。

己の能力を信じるべきか、封印すべきか。

鬼役の試験官が、ゆっくりと口を開く。その声は、機械のように無感情だった。

「——だーるーまーさー……」

悪意に満ちたデスゲームが、今、静かに始まった。

第四試験

悪意のデス・ラン

「——だーるーまーさーんーがーこーろーんーだッ」

鬼役の試験官が振り向いた瞬間、講堂の光景は一変していた。

トップに躍り出たのは、やはり**玉置ケン**だった。詠唱が始まった瞬間にロケットスタートを切り、【運動神経Lv3】と【バランス感覚Lv2】を完璧に制御して急停止。その姿は、まるで彫像のように微動だにしなかった。

その数メートル後ろに、**なめらすじ喇魅悪**と**エドウィージュ・ド・パウロウニア**が続く。喇魅悪は【身軽Lv.3】で影のように疾走し、エドウィージュは優雅な足取りながらも、驚くべき速度で距離を稼いでいた。

後方では、醜い争いが始まっていた。

「ブヒィ…！」

成金ザイバッツが、憎き**架神恭介**の足元に、自分の【スーツLv.3】からこっそり抜き取った高級なカフスボタンをばら撒いていた。【侵入Lv.2】のスキルを応用した、姑息な妨害だ。

「てめえ…！」

恭介も負けじと、ザイバッツの進路を塞ぐように立ちふさがる。

二人の低レベルな争いを尻目に、**飛入サンタ**は「おっと、いかんいかん」と呟きながら、自分の巨大な【プレゼント袋】を走路に「うっかり」転がし、後続への巧妙な障害物としていた。

そして、ただ一人。**探偵院金卵**だけは、スタートラインから一歩も動いていなかった。彼女はただ、目を閉じ、鬼の詠唱のリズム、声のトーン、そしてこのゲームに隠された本質を、【探偵Lv.3】の能力で静かに分析していた。

「——だーるーまーさーんーがー…」

二度目の詠唱が始まった。

玉置ケンが再び猛然とダッシュする。その背中に向かって、喇魅悪の悪意が牙を剥いた！

彼女の尾てい骨から伸びる毒蛇「大塚スネーク」が、床を滑るように疾走し、ケンの足首に絡みつこうとする！これは明確な能力行使。だが、蛇の動きは極めて小さく、センサーが検知するかは賭けだった。

しかし、その喇魅悪の背後から、さらに巧妙な悪意が放たれる。

「…お下品ですわ」

エドウィージュは、鬼が振り向く寸前、扇子で微かな風を起こした。『ウィンディフロウ』。能力痕跡を極限まで抑えた、ほんの僅かな空気の揺らぎ。それは、喇魅悪の【身軽】なバランスを崩すには、十分すぎる一撃だった！

「——ころんだッ！」

鬼が振り向く。

ケンの足首を狙った大塚スネークは、エドウィージュの風に煽られて僅かに軌道を逸らし、空を切る。そして、その風を受けた喇魅悪自身の体幹が、コンマ数ミリ、ぐらりと揺れた。

バシュッ！

無慈悲な電撃弾が、喇魅悪の体を撃ち抜いた。

「がッ…！？」

痙攣しながら倒れ伏す喇魅悪。失格だ。

その連鎖は、後方にも波及する。

「ブヒィ！」「うおっ！」

カフスボタンとプレゼント袋に足を取られたザイバッツと恭介が、もつれ合うようにして転倒。動いていると判定された二人に、容赦なく電撃弾が突き刺さった。

バシュッ！バシュッ！

一瞬にして三人が脱落。生存者は、ケン、エドウィージュ、サンタ、そして未だ動かぬ金卵の四人となった。

「——だーるーまーさーんーがー…」

三度目の詠唱。もはや敵はいない。玉置ケンが、勝利を確信して最後のスパートをかける。

その時、スタートラインで静観していた探偵院金卵が、初めて動いた。

いや、動いたのは、彼女の唇だけだった。

「——『真相究明価値あり』」

静かな、しかし絶対的な支配の言葉。

「この遊戯の『ルール』よ。ワタクシの勝利のために、その機能を最適化なさい」

彼女の能力は、鬼役の試験官個人に向けられたものではない。この「だるまさんがころんだ」

というシステム、その判定プログラムという「謎」そのものに、直接干渉したのだ。

精神内で完結した能力は、センサーに検知されない。

「——ころん……だ………」

鬼の動きが、ほんの僅かに、しかし明らかにスローモーションになった。

システムの根幹に介入されたことで、処理に致命的なラグが発生したのだ。

その、永遠にも思えるコンマ数秒の隙を、**玉置ケン**は見逃さなかった。

「うおおおおッ！」

彼は最後の力を振り絞り、鬼の背中に飛び込む！

ピコン！

高らかな電子音と共に、合格ボタンが赤く点灯した。

ケンの純粋な身体能力が、金卵がこじ開けた理不尽の扉を、真っ先に駆け抜けたのだ。

ケンのゴールと同時に、鬼の動きは正常に戻った。

やがて、エドウィージュ、サンタが次々とゴール。探偵院金卵は、最後までスタートラインから動くことなく、静かに微笑んでいた。

「ブラボー——ッ！ 素晴らしい！ なんという結末だ！」

一色京は、オペレーター席で立ち上がり、狂ったように拍手を送っていた。

「正攻法がトップを勝ち取り、妨害合戦が共倒れを招き、そして…！ ルールそのものをハッキングして場を支配する者が現れるとは！ これぞ才能の坩堝！ これぞスズハラコーポレーションの採用試験だッ！！」

彼の狂的な賛辞は、勝者と敗者がくっきりと分かれた、静かな講堂に木霊した。

【第4試験 結果報告】

[だるまさんが転んだ]

▼獲得ポイント

玉置ケン: 10点

エドウィージュ・ド・パウロウニア: 9点

飛入サンタ: 8点

探偵院金卵: 0点 (※ゴールせず)

なめらすじ喇魅悪: 0点 (失格)

架神恭介: 0点 (失格)

成金ザイバツツ: 0点 (失格)

幕間：王座へのプレリュード

講堂に満ちるのは、勝者の歓喜と敗者の沈黙。そして、全てを嘲笑う一色京の高笑いだけだった。

電撃で気絶していた三人は、いつの間にか現れた「お祈り部隊」の無感動な作業によって意識を取り戻したが、その表情は敗北感と屈辱に歪んでいた。

「素晴らしいフィナーレでした！まさに、我が社の求める人材像の縮図！純粋な力、狡猾な策略、そしてルールを捻じ曲げる絶対的な異能！」

一色は満足げに頷くと、オペレーター席から優雅に降り立った。

「さて、皆様。この茶番も、いよいよ大詰めです」

彼の言葉に、参加者たちの間に緊張が走る。

累計ポイントは、**探偵院金卵**、**玉置ケン**、**エドウィージュ・ド・パウロウニア**の三人が29点でトップに並ぶ、前代未聞の大混戦。そのすぐ後ろを、27点の**なめらすじ喇魅悪**が虎視眈々と狙っている。

誰もが、最終試験の結果次第で、全てがひっくり返ることを理解していた。

「——次の試験で、この長いようで短かった採用試験は、全て終了となります」

一色は、芝居がかった仕草で参加者たちを見回した。その瞳は、これまで以上に愉悦に満ちている。

「これまで、君たちには様々な形で『才能』を見せてもらいました。プレゼンテーション能力、協調性、妨害工作、そしてルールの穴を突く独創性…。しかし、企業という戦場で最も重要となる能力が、まだ試されていませんね」

彼は、ゆっくりと、一言一言を噛みしめるように言った。

「——それは、敵を叩き潰し、その全てを奪い取る、純粋な『暴力』です」

その言葉と同時に、参加者たちの足元の床が、音もなく消失した。

浮遊感。そして、落下。

悲鳴を上げる間もなく、彼らの体は光に包まれ、次の瞬間、全く別の場所に立っていた。

石と鉄の匂い。吹き抜ける風。

そこは、古代ローマの闘技場を思わせる、巨大な円形コロシウムだった。

観客席には、人っ子一人いない。ただ、無数の松明が壁に掲げられ、闘技場全体を不気味に照らし出している。

そして、その中央。

一段高くなったステージの上に、光り輝く水晶でできたかのような、豪華絢爛な玉座が鎮座していた。

参加者たちは、コロシアムの各所にバラバラに転送され、互いに距離を取った状態で立たされている。同時に、彼らの胸元に、スズハラコーポレーションのロゴが入った金属製のバッジが、音もなく装着された。

コロシウムの上空に設置された巨大なスクリーンに、一色京の顔が大写しになる。その表情は、もはや愉悦を通り越し、恍惚の境地にあった。

【最終試験：バトルロイヤル「王座への挑戦」】

「——課題は、シンプルです。他プレイヤーからバッジを奪い、自らのバッジを守った状態で、中央の『光の玉座』に座ること」

究極の、そして最も原始的な実力行使。

これまで溜まりに溜まった鬱憤、憎悪、そして殺意を、全て解放することが許される最後の舞台。

「ルールを説明しましょう。他プレイヤーのバッジを最低1個と、自らの初期バッジを持った状態で、最初に光の玉座に着座した者が、このゲームの勝者となります」

スクリーンの中の一色が、指揮棒で玉座を指し示す。

「採点基準！ ゲーム終了時に所持しているバッジ1個につき、最終得点にプラス10点！ そして、見事、光の玉座に座った者には、ボーナスとして、さらにプラス10点が与えられます！」

つまり、勝者となるためには、最低でも2つのバッジ（+20点）と玉座ボーナス（+10点）で、合計30点を獲得する必要がある。

それは、現在のポイント差を覆し、大逆転を可能にするに十分な点数だった。

「ああ、もちろん、このコロシウム内でのあらゆる暴力、能力行使は自由！ 殺し合い、奪い合い、思う存分、君たちの本性を曝け出さない！」

スクリーンの中の一色が、狂ったように笑う。

架神恭介は、ギザギザの歯を剥き出しにして、**成金ザイバツ**を睨みつけた。

エドウィージュは、憎き**探偵院金卵**に、扇子の先を突きつける。

なめらすじ喇魅悪は、舌なめずりしながら、近くにいる**玉置ケン**を品定めするように見つめていた。

因縁が、殺意に変わる。

策略が、暴力に変わる。

全ての始まりであり、全ての終わりとなる、最終試験。

「それでは、始めなさい！我が社の唯一無二の王座に、その汚れた尻をねじ込むのは、果たして誰か！最後の一人になるまで、存分に殺し合うがいいッ！！」

ゴングの音が、コロシアMに鳴り響いた。

7人の魔人による、最後の戦いが、今、始まる。

最終試験

バトルロイヤル「王座への挑戦」

ゴングの音は、開戦の合図だった。

真っ先に動いたのは、復讐に燃える二人の男。

「デブウウッ！ てめえだけは、この手でカレーにしてやるぜえッ！」

「ブヒィッ！ その汚い口を二度と開けなくしてやるブヒィ！」

架神恭介と**成金ザイバツ**は、互い以外の全てを無視して一直線に激突した。恭介は【包丁さばきLv.2】のスキルで懐から取り出した調理用ナイフを振り回し、ザイバツは【デブLv.1】の肉体を盾に突進する。子供の喧嘩のような、しかし殺意だけは本物の醜い乱戦が、コロシアムの片隅で始まった。

その乱戦を尻目に、トップ集団は冷静に動く。

「——まずは、あなたから排除しますわ、玉置ケン！」

エドウィー・ジュ・ド・パウロウニアは、最も近くにいた**玉置ケン**を標的に定めた。『ウィンディフロウ』で暴風を巻き起こし、ケンの体勢を崩しにかかる。

「うおっ！？」

ケンは咄嗟に『ケンダマソウル』を発動。けん玉の糸をアンカーのように地面に突き刺し、暴風に耐える。だが、エドウィー・ジュの真の狙いは別にあった。風で舞い上げた砂埃が、ケンの視界を完全に奪う！

その一瞬の隙を、影が突いた。

「——もらった」

蛇のように忍び寄っていた**なめらすじ喇魅悪**が、砂埃の中から躍り出た。【身軽Lv.3】の動き

は、視界を塞がれたケンには捉えられない。彼女の鋭い爪が、ケンの胸元に輝くバッジを寸分の狂いなく引き裂いた！

「しまっ…！」

ケンが気づいた時には、すでに喇魅悪は距離を取っていた。彼女の手には、ケンのものと思しきバッジが握られている。

「フフ…やりましたわね、喇魅悪さん」

「貸し一つだ、貴族女」

一時的な共闘。目的は、純粋な身体能力で脅威となる玉置ケンの、早期脱落。

しかし、その悪意の連携を、さらに上回る悪意が嘲笑っていた。

「あらあら、お二人とも。ワタクシを忘れてはいけませんわ」

声は、頭上から聞こえた。

見上げると、コロシアムの壁面、観客席の最上段に、**探偵院金卵**が優雅に立っていた。彼女はいつの間にか移動し、戦場を高みから見物していたのだ。

「あなたの【リーダーシップ】は、確かに優秀ですわ、エドウィージュさん。ですが、そのせいであなたは、常に『駒を動かす側』に立とうとする。それが、あなたの最大の弱点」

金卵が指を鳴らす。それは、誰かへの合図だった。

「——ワシも、もう甘いことばかりは言っておれんのでな」

エドウィージュの背後から、ぬっと巨大な影が現れた。**飛入サンタ**だ。彼は、エドウィージュと喇魅悪がケンに集中している隙を突き、音もなく背後へ回り込んでいたのだ。

「プレゼント・フォー・ユー」

サンタの魔人能力が発動する。彼がエドウィージュに差し出したのは、「勝利への最短距離」。

そして、強制的に徴収した対価は、彼女の「仲間を信じる心」。

エドウィージュの脳裏に、喇魅悪が自分を裏切る未来が、幻覚として叩き込まれる！

「なっ…あなたッ!？」

混乱し、喇魅悪を睨むエドウィージュ。その一瞬の隙を、サンタは見逃さなかった。彼の巨腕が伸び、エドウィージュのバッジを力づくでもぎ取った！

「なっ…サンタ、てめえ！」

漁夫の利を狙っていた喇魅悪がサンタに殴りかかるが、時すでに遅し。

サンタは二つのバッジを手に、一直線に中央の玉座へと走り出した！

「させるかぁッ！」

バッジを奪われたケンが、残る力を振り絞ってサンタの前に立ちはだかる。

「どけいッ！」

「どかんッ！」

【力持ちLv.1】のサンタと、【頑丈Lv.2】のケンの、純粋なパワーのぶつかり合い。その激突が、コロシウムに新たな隙を生んだ。

「——好機ですわ」

全ての混乱を、ただ一人、高みから見下ろしていた探偵院金卵が、静かに呟いた。

彼女は、コロシアムの壁を蹴ると、まるで重力など存在しないかのように、ふわりと宙を舞った。その落下地点は——

——誰もがバッジの奪い合いに夢中になり、がら空きになっていた、中央の『光の玉座』。

彼女の手には、初期装備のバッジが一つだけ。

ルール上、これでは勝利条件を満たせないはずだった。

だが、彼女が玉座に触れる寸前、その口元が、勝利を確信する笑みを形作った。

「『真相究明価値あり』」

囁きが、響く。

対象は、このコロシウムに転がる、一つの物体。

——低レベルな争いの末、恭介に殴り倒されて気絶した成金サイバッツの胸で、虚しく輝く『彼のバッジ』。

「——バッジよ。あなたの真の持ち主は、このワタクシ。さあ、ワタクシの元へおいでなさい」

概念への干渉。

『所有権』という概念の、強制的な書き換え。

次の瞬間、サイバッツの胸元にあったバッジが、ひとりでに剥がれ落ち、弾丸のような速度で宙を飛び、玉座へと向かう金卵の手に、吸い込まれるように収まった！

そして、着地。

二つのバッジ——一つは自らのもの、もう一つはサイバッツから『所有権』を奪い取ったもの——を手にした探偵院金卵が、光の玉座に、深く、そして優雅に腰を下ろした。

その瞬間、コロシウム全体に、試合の終了を告げる高らかなファンファーレが鳴り響いた。

全ての戦闘が、止まる。

誰もが、何が起きたのか理解できず、ただ玉座に座る一人の少女を、呆然と見上げるだけだった。

暴力が渦巻く戦場で、一度も他者と刃を交えることなく、ただ一人、ルールの根幹をハッキングし、概念を書き換えることで、彼女は、この狂気の採用試験の『王』となったのだ。

スクリーンに映る一色京は、もはや笑ってはいなかった。

ただ、畏怖と、狂信と、そしてほんの少しの嫉妬が入り混じった、恍惚の表情で、玉座に座る新たな支配者を、見つめていた。

エンディング

ファンファーレの残響が、巨大なコロシウムに吸い込まれていく。

まるで時間が止まったかのように、全ての参加者が動きを止め、ただ一点、中央の光り輝く玉座を見上げていた。そこに座るは、一人の少女。一度も血の匂いをその身に纏うことなく、ただ己の異能と知性だけでこの狂気のバトルロイヤルを制した、**探偵院金卵**。

彼女の手には、自身のものと、そして今やその所有権が完全に彼女のものとなった、成金ザイバッツのバッジが二つ、静かに握られている。

「そ…そんな…」

「ルールを…ハッキングしたっていうのか…？」

「化け物…」

呆然と呟く玉置ケン、信じられないものを見るエドウィージュ、そして忌々しげに舌打ちするなめらすじ喇魅悪。誰もが、そのあまりに規格外な決着に、言葉を失っていた。

やがて、コロシウムの上空に設置された巨大なスクリーンに、試験官・一色京の顔が大写しになる。その表情は、もはや愉悦を通り越し、神の奇跡を目の当たりにしたかのような、恍惚としたものだった。

「——勝者、探偵院金卵ッ！！」

彼の宣言と共に、最終試験のポイントがスクリーンに表示された。

【最終試験 結果】

- **探偵院金卵:** 所持バッジ2個(+20点) + 玉座着座(+10点) = **合計30点**
- **なめらすじ喇魅悪:** 所持バッジ2個 = **合計20点**
- **飛入サンタ:** 所持バッジ2個 = **合計20点**

- **架神恭介:** 所持バッジ1個 = **合計10点**
- **玉置ケン:** バッジなし = **合計0点**
- **エドウィージュ・ド・パウロウニア:** バッジなし = **合計0点**
- **成金ザイバッツ:** バッジなし = **合計0点**

この結果が、これまでの累計ポイントに加算されていく。

【累計ポイント速報】

1. **探偵院金卵:** $29 + 30 = 59$ 点
2. **なめらすじ喇魅悪:** $27 + 20 = 47$ 点
3. **飛入サンタ:** $21 + 20 = 41$ 点
4. **玉置ケン:** $29 + 0 = 29$ 点
5. **エドウィージュ・ド・パウロウニア:** $29 + 0 = 29$ 点
6. **架神恭介:** $8 + 10 = 18$ 点
7. **成金ザイバッツ:** $1 + 0 = 1$ 点

「ククク…素晴らしい！暴力と策略が渦巻く戦場で、最もエレガントに、最も効率的に勝利を掴み取った！まさに圧巻！これで、君たちの順位はほぼ確定したと言えるでしょう！」

一色の言葉に、エドウィージュは扇子を握りしめ、その肩を悔しさに震わせた。玉置ケンは、己の無力さに唇を噛む。なまじトップを争っていただけに、最後の最後で突き放された無力感は、より一層深く彼らの心を抉っていた。

だが、一色は、まるで最高のデザートは最後にとっておいたとでも言うように、悪魔的な笑みを浮かべて続けた。

「——しかし。これは、まだ『最終結果』ではありません」

その一言に、参加者たちが顔を上げる。

「この採用試験…実は、君たちに開示していない、もう一つの評価基準が存在したのです」

スクリーンに、新たな文字が映し出された。

【隠し採点項目：印象点】

「この試験は、単なるポイント稼ぎのゲームにあらず。試験官である、この私自身が、君たち一人一人の『価値』を、独断と偏見で評価していました。いわば、内申点。それが、今から君たちの得点に加算されます」

ざわめきが、コロシウムに広がる。

「印象点…ですって？」

金卵ですら、その瞳に僅かな驚きを浮かべていた。彼女の『真相究明価値あり』は、試験のルールという「表層の謎」には干渉できても、試験官の胸一つに秘められた「評価者の心」という深層の謎までは、読み解けなかったのだ。

「評価基準は二つ。一つは、【好感度点】。単純に、この私が君たちを『仲間として共に働きたいか』『見ていて面白いのか』で評価した、-10点から+10点の点数です。そしてもう一つは、

【実証点】。第一試験で君たちがアピールした『会社への貢献』を、この試験全体を通して、どれだけ行動で『実証』できたか。これを0点から+10点で評価しました」

一色は、恍惚とした表情で、指揮棒を振った。

「それでは、一人ずつ、この私からの『最終評価』を賜りましょう！ 光栄に思うがいい！」

彼の言葉と共に、スクリーンに一人の顔がアップで映し出された。

「まずは君だ、**成金ザイバツ君**」

「ブ、ブヒィ！？」

「君のアピールは『僕自身が富そのもの』だったね。だが、君が見せたのは、借り物のスーツと虚栄心だけ。何の価値も実証できなかった。そして、君という存在は、あまりに醜く、退屈で、見ていて不快だった。よって、君への評価は…」

スクリーンに、無慈悲な数字が叩きつけられる。

【好感度点: -10点】 【実証点: 0点】 合計: -10点

「最終結果、**マイナス9点**だ！ おめでとう！ 君は、この試験における唯一のマイナス点を記録した、真の『無価値』だ！」

「そ、そんなあああ！」

絶叫するザイバッツ。だが、誰も彼に同情する者はいなかった。

「次は君だ、**架神恭介**君」

「……」

「『社員食堂を世界一にする』。その発想は、実にテロリストチックで面白かった。君のそのバカで単純なエネルギーは、スパイスとしては悪くない。だが、結局君は、試験中に一度もその料理の腕を会社への利益として示すことはなかったね。ただ、本能のままに暴れるだけだった。よって…」

【好感度点: +5点】 【実証点: +3点】 合計: +8点

「最終結果、**26点**。まあ、妥当なところだろう」

「次。**エドウィージュ・ド・パウロウニア**さん」

「……！」

「君は美しく、高貴だった。そのプライドは、時に輝いて見えたよ。特に、金卵君に敗北した時の、あの絶望に歪んだ表情は、実に芸術的だった。だが、君のリーダーシップは、脆くも崩れ去った。アピールを実証したとは、到底言えまい。協力者としては、少々プライドが高すぎるかな」

【好感度点: +4点】 【実証点: +4点】 合計: +8点

「最終結果、**37点**。美しいだけの花は、すぐに枯れるものだよ」

エドウィージュは、何も言い返せなかった。一色の評価は、的確に彼女の痛いところを突いていた。

「さて、**玉置ケン君**」

「……おう」

「君のスキルは本物だ。けん玉一つで、攻防に渡り素晴らしいパフォーマンスを見せてくれた。

その実直さは、組織の歯車としては優秀だろう。だがね、君はあまりに予測可能だ。正々堂々、

フェアプレー…結構。だが、この私を楽しませる『悪意』や『意外性』に、著しく欠けていた。

君は一流のプレイヤーだが、最高のエンターテイナーではない」

【好感度点: +3点】 【実証点: +7点】 合計: +10点

「最終結果、**39点**。君の人生は、きっと正しいのだろう。だが、退屈だ」

「**飛入サンタ君**」

「……」

「君には、正直がっかりしていた。ただの退屈な善人かとね。だが、最後の最後で、君は実に素

晴らしい『悪意』を見せてくれた。エドウィージュ君を欺き、そのバッジを奪ったあの瞬間…私

は少しだけ、君を見直したよ。アピールした『対価を伴うプレゼント』も、限定的だが実証でき

たと言えるだろう」

【好感度点: +2点】 【実証点: +5点】 合計: +7点

「最終結果、**48点**。人は、見かけによらないものだねえ」

「さあ、残るは二人だ！ まずは君、**なめらすじ喇魅悪さん**！」

「……フン」

「君は良かった！ 実に良かったぞ！ そのダーティな実利主義！ 勝利のためなら、共闘も裏切り

も厭わない、そのブレない姿勢！『汚い仕事を引き受ける』というアピールを、君は最初から最後まで、完璧に、そして美しく実証し続けた！私はね、君のような人材が大好きなのですよ！」

【好感度点: +8点】 【実証点: +9点】 合計: +17点

「最終結果、**64点**！素晴らしい！君は、まごうことなきエリートだ！」

喇魅悪は、予想外の高評価に、僅かに目を丸くしたが、すぐに不敵な笑みを浮かべた。

そして、ついに。

一色京は、玉座に座る少女へと、まるで愛を告白するかのような、熱のこもった視線を向けた。

「——最後に、**探偵院金卵君**」

彼の声は、震えていた。

「君は…君は、完璧だった」

「……」

「君は、この試験という『舞台』そのものを、君自身のステージへと変えてしまった。試験官である私の秘密を暴き、協力という名の茶番を破壊し、システムのルールすらもハッキングして、勝利を手にした。君のアピールは『謎を解き明かす』。そして君は、この採用試験に隠された全ての謎を、誰よりも深く、誰よりもエレガントに解き明かしてみせた！君の存在そのものが、エンターテインメントだ！仲間？違うな。君のような存在は、ただ崇め、鑑賞すべき『芸術品』なのだよ！」

一色京は、恍惚の表情で、最高評価を叩きつけた。

【好感度点: +10点】 【実証点: +10点】 合計: +20点

「最終結果、**79点**ッ！！」

スクリーンに、最終的なランキングが映し出される。

【最終結果発表】

1位：探偵院金卵 (79点) - 優勝

2位：なめらすじ喇魅悪 (64点)

3位：飛入サンタ (48点)

4位：玉置ケン (39点)

5位：エドウィージュ・ド・パウロウニア (37点)

6位：架神恭介 (26点)

7位：成金ザイバツツ (-9点)

圧倒的な、絶対的な勝利。

探偵院金卵は、その結果を静かに見届けると、ゆっくりと玉座から立ち上がり、スカートの裾をつまんで、優雅に一礼した。

「光栄ですわ、試験官殿。皆様も、お疲れ様でした。なかなか、歯ごたえのある遊戯でしたわ」
その言葉は、勝者の余裕か、あるいは敗者への最大限の皮肉か。

「——スズハラコーポレーションは、探偵院金卵君、君を、次期幹部候補生として、心から歓迎する！」

一色の宣言と共に、金卵以外の参加者たちの足元が、再び音もなく開いた。

「なっ！？」「うわっ！」

「敗者の諸君、ごきげんよう。君たちの存在は、この素晴らしいショーを盛り上げる、最高のスパイスになりましたよ。その健闘を称え、記憶の片隅に留めておいてあげましょう。では、さようなら」

悪魔の別れの言葉と共に、6人の魔人たちは、為す術もなく奈落の底へと吸い込まれていった。

静寂が戻ったコロシウム。

残されたのは、光り輝く玉座の前に立つ、一人の少女と。

彼女を、狂信者のように見つめる、一人の男だけ。

「これからよろしく頼むよ、探偵院金卵君。僕の…いや、我が社の『最高傑作』」

一色が、うっとり手を差し伸べる。

金卵は、その手を取ることなく、ただ不敵に微笑んだ。

「ええ。このスズハラコーポレーションという巨大な密室に眠る『謎』…存分に、楽しませていただきますわ」

二人の不気味な笑い声が、誰もいなくなったコロシウムに、いつまでも響き渡っていた。

こうして、一人の規格外な天才が、その伝説の第一歩を刻み、狂気に満ちた採用試験は、静かに幕を下ろしたのだった。